西洋列國史畧

附防海策　下

リ 9
4803
2

門 98
號 4803
卷 2

昭和十六年三月五日
石澤介吉氏寄贈

石澤氏藏書

西洋列國史畧巻之下

西洋大古よりの帝王沿革及自立法國の
小傳略より上巻に紀載せし所以は昔時より著
人力大洋を航行し万国通津を始
来り記して以て航海通商の國家の要務
なる我示し且彼伊斯把尼亜波尼杜瓦尼曾
西亜諸尼利亜(シアエキリス)亦の法国近来支業の廣大なる
我洋々として今の世界の大事業を為すに
説くに足るものとし
抑歐羅巴の諸國に於て航海を始め

他邦を通し多くハ上古の世より亜細亜洲の「ペニシヤ」
国の人ども国の西海より船を発して遍く地中海並
の欧羅巴洲及び西方亜弗利加洲の濱海の諸国
まで到りて貨物を交易せるなり是西洋の諸紀
に於てかの邦の呉地より航海せし船形を羅馬
の革命より七千餘年前より亜細亜洲中の
「テイリ」国の王ども人を命じて船を出して地
中海並濱海及び大海の道海諸国を通商
大ふるまを以て写せり是よりして諸国多く海外舟
行して交易を為せハ国家の利を興すの極め

大ふるまを以て写せり是を潛とうくとも悉皆海
の隣国より船行きて敢て海外絶情ず
ることの有ることなし雲津の華屋より九百
六七十年以前加徳要の「世ロニ」王の時多くの海船
を製造して自国の産物貨を載せ西紀海より
発船し遠く大洋を航行して「オヒル」国及び地
の諸国を通て「オヒル」国ハ氣候温熱なるして鬱く草金銀産
又象牙孔雀猩猩猴ホを初て花剌列の新の諸国又
此物産を儀の地まて交易して得ること他の諸物の

多きを 彼の人の思ふ儀の及ぶ所なるを知る
べし 如彼亜国の富めるを世界に名あるの赤
くを思ふに「エリサレム」城中に金銀充満せり 今は
亡ぶ西洋に称せられる天竺銭 称せられる
ホハ必ずこの撒刺満王を引き強となすなり然
共其為財成るを記載せるの基路略しく
を国家やこの「オヒル」国おのづから化の法を今の
いづれの国なるを詳にして蓋し為時の度
船を行るるの多く大海の星を準とせ
る而已なるて海上を行て今時のごとく測量の

法器なきの故なるを方向所在地理海道を明白な
記録せるを以て「オヒル」とつへる国の
名のごとくなるべし 支那地球を画船中
この法志なる人乃ち西洋の総天子羅
皇帝亜国の業衰微して遂に「ペルシア」亜
国の代となる百見西亜亡びて「ヒキリスト」勒密亜国の代となる
「ヒキリスト」勒密亜国の代となる
奥亡の習ハ西洋の法を分割して羅馬国の代となり
多ひ乱世のごとく治世少く是ならずおの
つから天航海通商ホまるカを生さるるなり 只

キリイキス（ヒ）の大祖アレキサンデル（ヒ）帝をくだし（ヒ）亜
天竺の法を破滅して今の榜葛剌国の安日河（カシケ）
より数万の海船をかりて亜（ヒ）の南海をひそれ
ども羅島（ヒ）諸島（ヒ）を攻（ヒ）て亜（ヒ）の南海をひそれ
入て又中国の海船をかりて軍容の盛なる船舶の
多き千古の奇観なりと編せり其後羅馬（ミヤリ）
ウスカウエ（ヒ）帝西洋を一統しその子第二世アウ
グストス（ヒ）帝の世なるに及て学士を命じ法の地理
志を撰しむ其後百年を経て羅馬の学士プリ
ニウス（ヒ）なる者天文地理人物の出を撰しま

ず捨年の後は陀（ヒ）ルトメ国アレキサンテリヤ（ヒ）城の学校の
大師コロトメウス（ヒ）と云人天文志及び地理志を著
せり是かして天文地理測量の学日々に盛
なるに及ぶ法の法則「イイタラヒ」「クタンヒ」地平
儀象限儀を製作し別に線儀を製作
八月八日を測り夜八星を測り向を分ち路
程を識り万里大洋を隔て星象の異なるを
を経四年の熟練を経て彼土に「オヒル」
航海して千地勢を問を備へなきものを
真の事を問て論ずる者を捨て亜（ヒ）

地理名勝山川風俗物産經濟今度氣候変換
之義詳ニ説明ス以テ航海ノ助ヲ成ス
術日ニ精密ニシテ測船ノ法月ニ巧妙ナリ但風
暴波ニ遇フトキハ一ツモ恐ルヽ所ナシ於是ヲ
歐羅巴ノ諸國ニ人ヲ送リ先ヅ潛商トシテ邏ル
革命第七千三百四十六年（日本貞和二年元亡ノ六年丙戌ニ當ル）ヨリ探所
察ヲノ人始メテ亜弗利加洲ノ西海ニ出ル省匿亜
ヲ過リテ交易ヲ為シ二十四年（日本應永二十七年明ノ永樂十八年）
ヨリ波尔杜瓦尔ヲノ人「ドンヨアンコンサルペス」及「チリスタ
ハアス」ヲシテ西海ヲ探ラシメ「ホルトサント」及

「マデラ」の二洲ヲ見出ス「ホルトサント」ハ長サ
拾里余幅弐里余「マデラ」ハ西ニアリテ長三十二里幅十二
里共ニ極メテ肥沃ノ土ヲ有ス故ニ之ヲ地ヲ定メ本
國ヲ守令城壘ヲ築ク今「マデラ」ヨリ出ル所ノ蒲萄酒
甚タ美ナリ千百三十四年（日本延元二年）城郭ヲ築ク伊斯把尔亜ヲノ
人ヨリ左ニ二島ヲ南方ニ向ヒテアリヤ十六隻ヲ以テ
之ヲ領シ此十二島ノ内ニ最大ナルヲノ七ツ所極メ
て肥沃ノ地ニシテ蒲萄酒及ビ砂糖ヲ出サヽコト
おびたゞしくして世ニ名アリ一千四百四拾年（日本永享十二年明ノ宣統六年）
ヨリ波尔杜瓦尔ヲノ人亜弗利加洲ノ西海ヲ

白峯及び「アルゲイン」島まで行て之を開き又是
より西して爲匿亜國の海岸「クレインキユスト」「コウトキユスト」
「ゼントキユスト」の地を通商し此地又穀百葉黄金
象牙を出す故を駿府へ世を移りより始まる
阿蘭陀玉譜尼利亜國弟那瑪尔加國の今又
此地まで交易の振舞と様〳〵なる古人と互
市致す是一千四百四十六年明ノ正統十一年ヨリ波尔杜尼尔
國の人又爲匿亜の海岸なる孤峯を過り又獅山を
過る此所駿府親を為る故に土人と交易して銀を
得ること甚多し教化を施して其國王臣民を教

まで〳〵かふを孤峯の海上より十島なり大小世ヨ
沃土にして穀物茶銀出し又猛獣多し波尔
杜尼尔國の人悪くその地銀峯一世中の「ゼントヤ」
と云へる爲城を築き守令を設ひ防禦兵元
を置き〳〵を「ゼントヤ」と称護し又天教の導師を置き
て其土人教化せ一千四百八十四年日本文明十六年明成化二十年
ヨ波尔杜尼尔の人又爲匿亜國の東南なる
工鄂國ヨリ西ヨリ亜弗利加洲西海岸の
大島にして東ハ亜昆心城の法ヨリ西ハ大洋ヨ
而ひ南ハ馬拿莫大巴ヨ及曷吠弗利ヨ接し北ハ

為匿亜國の法部より異なる中より班ゴ岐コンゴ
羅及コロンビア安部辣工鄂コロンビア
法王ペルーの中より於て安部辣工鄂ハ最大國之
法部にして肥沃の土地にして穀菓香桂
椰子檳榔柚香椰の類ひと産し又椰子酒大象牙奇
香の類最世に名なり此国を歐羅巴に通
ずる地付に「ヤアコッポカニス」にあるもの「ホルトカル」國王
の命令を奉じ始めて此地に到りて交易し又荒
廃の地を開き所々に植て其植地に擬コロンビア
と「シントハウロ」の地に城郭を築き守令官軍

乃ち僧官教化師を置き其近傍の土人を服
せしめ次第にその地を安きに至る此時に
意太里亜洲のうちにある熱帯亜国の人「キリスト
ホリ宗コンポス」といふ人なり天資穎慧にして
博く格物致知の学を修め又航海採船の術に
精し伊斯把尼亜の王「ヘルチナンド」に人の大賢
あるを聞き厚く招き脱ヤ々にて国を治め宗教
て以て師友とす「コロンポス」伊斯把尼亜のとき
に為ることを願ひ我知る王の為に大に国を
興さんと我欲し先ず王を説き遍く四方の

才徳賢能の士を招し学問又世界の理を極めて
西海後撤の所を必ず土佐人を以推知し地を
定んとを欲し国王を請て自分大船を駕し
大洋を渡て亦亦を求る西洋革命一千
四百九十二年（日本明應元年弘治五年）に「イスパニヨオル」「キユバ」
の武島を見出せり此武島皆土地甚大なるを以
て上よりの「コロンボ」「カナアリ」「ボルネオ」の比を
きはめたる地肥饒にして共に金銀珊瑚
産出せり殊に多く生姜
蘆薈良姜生姜龍涎香丁子
胡椒等を産出せり「コロンボ」此二島
の土人を皆懐柔して福府を定めて伊斯巴尼亜
国王の領地となし城郭を築き守令及び都督
軍卒を置き専ら教化を施し又僧官天教の導
師を置き人を教化せり「アメリ
コウ」とは亦南方の意太里亜の福樓察国の
人なり生れて而して頴敏材力倫彫学又
博学にして万物の理を究め極究する所
亦「イスパニヤ」国王の徴招を意し仕へて大官となり
去て千四百九拾七年（日本明應六年弘治十年）に「イスパニヤ」王の命

王國ニ大船十二艘ヲ艤シテ「イスパニヨオラ」島ヲ
尚ホ西方那波玉ニ出船求メ「三疆」の大洋を開
キ放見ノ「アメリカ」ニ大勢を永く接せる法
蘭人の為ニ開キ「而の地ヨ命シ」亜墨利加
大洋と名付け是を天下第四の大洋と為
又新世界と云ふ二千餘年前波尼牡爾尼國の王氏ヲ
使ヲ遣ハシ尚ホ海路の國土を探ねを試給ふ賢材
を撰て開拓の大使とし大船二千艘軍卒三
萬余人を發せり三千百零三年（日本文亀元年 明弘治十四年）
に亜墨利加洋の南端「フラミリヤ」玉ヲ見る氏地氣

候温熱ヲ以て蘭木錦花沖縄（ケマ）泊夫蘭「バルサモ」
の油椰子龍涎香肉桂丁香其他の諸穀諸菓の
類産物極て夥し去人八好て人肉を食ふ波尼（ポル）牡
（ト）
亜尼國の人能是を試始報ヲ発て其道二千餘里
の地を「ホルトカル」島の領と為し而て
第千四百七十新ヲ強守府を建て以軍を送り
天主教の僧官を是に置て土人を教化して
俗を改めしむ千五百零三年（日本文亀三年 明弘治十六年）ヨ伊斯
把尼（イ）亜國の「コンポステラ」なるもの始めて小亜墨（アメ）
利加洋の「合リ巴」の地を開く千五百零四年ヨ

佛蘭西（フランス）窓国の人もまた小亜墨利加（アメリカ）洲の地を目的
とする通商しきりに互市の利益を収めんとひい教化
して土人を感服せしめ免税の恩典を施し
地を開くこと甚だ大なり若しこれ新佛蘭西（フランス）窓
のとこころ処々に城郭を築き兵隊を置き益々
又亜傍の「バコラウプ」ホの諸国を併し地を開
くこと紀年五百餘年（明治十六年）
葡萄牙（ポルトガル）の杜尾（ポルトカル）ホの人「ハスクテカロ」といふ者の大洋を
渡りて大洋を廻り亜弗利加洲の南界を過ぎ
東印度に至り諸国を遍歴して

亜細亜洲の南海を出でて亜剌比亜百児西亜印度
亜ホの沿海諸国を測量し且つ諸国の事を
摸写して紀行号説の書を著し世に「ポルトカル」国
王に献ぜしに王大に喜び則ち地図を作り
隆盛なる亜細亜（アジア）洲の忽魯謨斯（ペルシア）島は実に百児西亜（ペルシア）
印度亜（インディア）「アラビヤ」等の諸国の要地なるを察
し先づ此島の主と和親を結び商館を設置
諸国貿易の便を為せんとして禮を厚くし
幣を送りて使を遣し和親を結ぶ忽魯謨斯
王これを許して和親を結ぶ使を拒む「ポル

トカル王国を攻て則小軍の督アルフケルを
命し大船十艘を発して武備を厳ま一旦ク
商賈の貨物を載せ商和親を結ん事アルフケル王命を奉し共
元我邦へ七千五百餘里を大洋を航して来
望厚遇を賜り亜剌比亜の近海法国に属する地
名を八忽魯謨斯の領有り称して忽魯謨斯
島八百児西亜海湾と亜剌比亜海の間にあり
百児西亜部中の渤尓曼に属し一城郭の名也
又忽魯謨斯と称す此処も良麗なる海港にて商

輿地全圖ニ渤ノ字ハ恐ハケルマニ作ル渤ノ誤ナラン

賈甚便利なる地にして貨物集し人煙輻湊土地豊なりとして実に
世界に有名の繁華の地なり忽魯謨斯の土人
同ルトカルの大船武備を厳にして来るを見て大なる
恐れを為す我邦にて備を為す アルフケルを
海岸の土人を擒にして捕を放ち使
として和親して交易を求んと我告れども
敢て応ぜず忽中に悪意を狭き軍我
船にて戦を為して波尓牡尓の人刃を交て
く是を破り海陸の城塁悉く砲撃破

呂宋王城を出でて港中に入るや直ちに交易城道
七人外に敢て他意なき我国王の司セイバスチン四ひ
国相「アメル」に告ぐ「アメル」敢て少き軍卒弐万余人を
師へ国内の船を集め戦艦と称し又数百艘
の船に連環を施し船際を防ぎて船橋
城作りて港口我要害に据ゑ波尔杜加尔船の
砲台我砲を多くの火船火筏を製造し囲
繞らして是を攻む彼れ波尔杜尼牙の船隊甚
大なるを規制極めて堅固なり
去る時「ポルトカル」の船十隻艘を艘毎に軍

卒四百人大筒若干門備え完全して大砲放合六
百門精兵凡五千餘人あり大将「アルブケル」を元
我指揮して大なるかな巨砲を発し火焔を飛
して忽魯謨斯を撃つ天地震動し世界
崩裂るごとく忽魯謨斯王の軍卒死せるもの
勝て計へられず戦艦破れ船橋悉く焼
卒せ敵を「オルムス」王および其相「アメル」大な
おそれ降伏毎年金銭を貢ぎ
属国となんと我請ふ「アルフケル」是我許し別
比を大なる城郭を築て守令我を置かして

印度亜の諸国との交易大きなる便を得て彼
ポルトガルは勝て云へる
亦杜瓦尼国の富強を
見て亦満剌加国より面商を国王と和親を
むすびその部部に商館を構へて交易をなす
国より能辯の僧愛を送りて大人を教化
帰服せしめ亦大なる恩徳我国に及ぼす千五百
一十年日本永正七年に当る葡萄牙人又来る我軍
て満剌加国の王城に乱入せむ王爭急にして防
戦さるる所の王子妃及び大子と共に走りて
皆山中に奔て放免せ彼ポルトガル人亦意を悪く

て国城奪て是より撤りて隣国の若耳国の王
と数度戦を交ること五百一十五年に彼ポルトガル人
印度亜の卧亜城攻て遂に地をとりたり
是を初め大小城郭を築き本国の将軍を元帥
守令僧官を我国に送て諸を統護教化せしめ是
此地我国基本として他の印度亜の諸国
に通商を求る五百一十七年日本永正十四年に当る
遂に姑爲て中華国の香山縣の阿馬港の地に
到る中華人のむかし数多の国なりし我国の
姑息と云王なり英傑絶倫にして悪徒国を

一統し支那は天下に双の長城を築いて威名
遠く西域及び亜細亜諸国に響き渡りて西洋諸
国多くの人の知る所なり我れらも中華は歴代
沿革して政治学芸共に改まり西洋人は秦の始皇の
名を知れども他我が知る今の世界なりて中華を後
国とし亜細亜諸の分捕祭亜細亞の人
をマルキユス・パロロと名づけなり西洋学者の説
に紀元前七百年頃に出でたる人なりと
四方を遍歴して難辛亜細亞を往来して主恩必烈と
いへる大王に仕へこれを大王は中華を伐ちの時後

元の中華を征し前後十七年の間滞留し用ら
れしこと後世度無の話を伝播して耳目に触れ人を感
ずる基なり後ち日本人敦厚にして
国用不足なく元代の廣大なる知識の広多なる
世界者なり日本の基礎花人の思議の及ぶ所なり
盛形の基礎花人の思議の及ぶ所なり
故に歐羅巴洲の話をその云を伝へ学
除く新幕して皆和親をむすび交易我国
を我が国に来りて方里偏絡して

敢て西洋諸国と競争するに足らず今海乃始めて開け
角逐の場に先ず山縣の治める所の五市を通商
貿易に開く次に府県に許す所の貿易場
数年を経て漸く進歩の許を蒙り商賈は阿馬港
(アマカウ)
に建て以来日本と交易を為すに至り廣東
(ホルトガル)
阿蘭陀(エキリス)
及び福建の商賈は日本の法を許を蒙り廣東
に於て海産は長崎に出る い波尔(ボルト)杜尼尔(ドニル)人
といふ中華より他国の貨物を黄金
石英珠翡翠大黄土茯苓綿布紡布金線錦花
磁器沙糖米穀ホ之を千五百二十九年 明永正六年 昭和徳十四年より
伊斯把尔亜国大小舟師を出して墨是(メキシコ)可(ニュ)を
征す墨是可ハ北亜墨利加洲第三の大国にして
西ハ「オハメキシコ」および東は紅海に臨し東ハ巴那麻
の峡を隔て南ハ大洋に臨む土地廣大象
俗温熱にして棉花を産出す
出し土地結布帛綿を加糖按尔撒摩(ルサモ)出珠及
コシチルテハ司セニルレ」ノ誤即「コニチル」ヲ尔法茉尔法穀法菓極免く多
蘭語「コーゼニール」ニシテ猩々緋ヲ染ル小虫ノ名ナリ
土人ハ稍々吳形の鬼神を尊信し像を刻是
して皆城郭を築き或ハ人を殺し牲とする者人死セ

る時八必ず人城ゆく殉とかなて北國兵威むて
より精強にして屬國の諸酋二百余國城邑數
百軍卒を百余万ありて是を亦古の帝王
始皇の大業の中より始皇國を双皇
城「ガラキユス」城と号し始皇より八九万の大家族
民物著廉にして玉勢を降服し初めて伊斯把
你亜王王侯を号し士城家にて下の頑学宏
村の人物数その國より来集し皆王の為より力城
を去城ゆく玉勢謝を張り兵威日に強
し於是者海和亜ある亜墨利加洲の地を開

拓し守令を置くゆく其地城治曼墨是可玉の
已北方地より迫る城西を思んて為に元を発して是を逐ふ
「イスパニヤ」王墨是可國の富強ある我ゆて和親を結び
交易を通せんと城部に志り使を送りてを
事を結ぶ早辞厚幣を献基敬を墨是可玉の
君臣敢て是を許たを國の大に兵の多を恃んて
受礼宜を し伊斯把你亜の群臣大に怒城怒り
年に軍船を送りてを使を礼婚し或ハ安を
掠暴し城邑城焼きはるひハ東西攻め或ハ
南北侵古ハを迫ハ城強接して敢て侵地に

戦艦大に傷を付き退き去る敵は墨是（メキシコ）
河の前師松堂姑兎て困し遂に敗走を三捨余
年を及ひしか内外困苦し依て皆奔命に疲る
遂に国内に乱起り五年間内乱に亦た伊斯把倚
亜国を内乱に陥るに乗じ「ヘルチナントスコルテス」を大
将として戦艦三百余炮兵五千余騎精兵五千
五千余人を発（ハツ）し墨是（メキシコ）可国を征伐せ「コルテス」
墨是可国に乱入し巨炮火を連発して依城を
攻破り八月の間に遂に城陥て墨是可
の総皇を擒に后妃諸皇子皆「カロステワ」西班牙に送り「カロステ」

則伊斯把倚亜（イスパニア）
国の王都ふりを次の年近の写に其依の属城を
悉く平定し属国の君長皆降伏せ皆分悉く
皆伊斯把倚亜（イスパニヤ）の郡県とす墨是可の帝都
に八「イスパニヤ」に一員の小王および天教伝宣の長を
置き大学校を建て子弟に属ずるも皆古今の伝
教を改めしむ故に墨国人を教化して皆降の悪
俗を改めしむ故に墨国人を「メキシコ」と名付て伊斯把倚亜（イスパニヤ）
とふ此年「ホトルガル」国の人に墨尾蘭（ラニ）と名付る者有り
て「イスパニヤ」王の命を奉し墨利加（メリカ）海の極南
小船の西行せる海路有やと尋ねて求めるその

海峡を見出せり これ我石佐伊く墨尾蝶尼峡と云ふ
を北ハ巴大温の地なり 別ち所謂長人国なる者之を
南の大地ハ平原廣袤にして烽火を見るのみなり名
づけて「テルラニヒユウヒ」と云ふ 別に地と云ふ義人昔時氏峡
南の地を以て一大海なりとす 墨尾蝶尼加大海
と呼び天下第五の大海なり 其間カラニヒ山出せり
以て之を見るべし 墨尾蘭ハ大亜細亞の西に馬路古
の諸島を過ぎ西に方進ず喜望峰を回り亦北に
向て一千五百三十二年 明応大永二年 嘉靖元年九月七日帰国
本国に到帆せり 海路の行程凡そ千二百三十四日

カ、而して其西洋に於て金地球を周せり 始め
ありて陸地を発射せり所の船に英国を奉して
「ピクトリヤ」と云ふ これハ船と云ふ義なり 仏国に方里
の風波を越び彼て彼て義く世界を周せりと形容
伊斯把你亜の玉墨尾蘭の切を盛ふりとして
厚く賞せ玉ハり此船今日動てかの玉を重賞
として彼へ与へり 千五百三拾二年 日本天文二年明
嘉靖十二年に伊斯把你亜国より 李露玉を征伐して
北玉ハ南亜墨利加海の西方にして北ハ金加西
腰の地なり南ハ智里に接し東ハ大山に限し

鮓答ハ司ピス
ペリアピ又ペリア
ステーントニカ和
名ハサラバサビ
即鰊腸ノ緒名
ナリ

西ハ大平洋ヲ隔メタル土地甚タ大ニシテ物産富
饒ナリ金銀ヲ以テ朱砂緑玉花瓶石鉢等ヲ作
リ絹綿花「コハルサモ」油菜穀菜葉類蔬菜ヲ自ラノ
ステーントニカ和名「ペリニウ」玉ノ「イシカス」トヲ附
即鰊腸ノ緒名ナリ帝王ナリ已ニ城名ヲ字ス「ペリニウ」玉ノ「イシカス」トヲ附
庸ノ諸侯二百二十余国ナリ皇城ヲハ故「キュスコ」私「ヌコ」
トヲ玉ヘリ甚タ隆盛ニシテ金像ノ諸王ヲ皆奔
走シテ貢ヲ献ス此王百余年以前ヨリ云威強大
ニシテ四方ヲ征服セリ東ノ「イシカス」ヲ去リテ
南庸ニシテ王ヲ所在ノ宮殿皆金銀ヲ鏤ム
英雄ヲ以テ寇極シ此大寺観ヲ造リ法師ヲ称

「シャカ」と云フ丈寺観ヲ以テ飾リ
内ハ黄金ヲ以テ極メテ巨大ナル実形
の神像ヲ安置シテ毎日輪ヲ其像ヲ
称シ其像ノ左右ニ実形の神像ヲ
列シ皆黄金ヲ以テ造リ其ノ多和の
式ヲ以テ飾リ其人ヲ以テ牡ヲ為ス化
故下の士民ハ皆富厚隆盛ナリ
ナ俗ノ大家ナリ「イシカス」此数千里の地ヲ君
ヲシテ軍卒ヲ貢金米ヲ和ム此王の政制
極メテ精院ヲ好ミシ又甚勇猛ナリ近隣各国の

玉なり「ニキユスエロ」と云ひ「イニカス」の世より該國の
王を推服して帝位を即しより以来該君皆威
を振し左平既に百余年に亦皆華蓋羅弱
なりて兵戦知らざるの有を聚くに地廣く戦
国を侍んで而して伊斯把倫亜玉の使者を殺
せり伊斯把倫亜玉の君臣大に怒り以
て
ペリユウ
孛露玉の昇平已に久敢武備の度弛せり戦
察知し於是乃拂蘭西斯哥思早訶禄を以て
大将軍として大戦艦「ヒキシエ」の玉を舎し教練
さる事凡八ヶ月の後墨是可より発し
ペリユウ
孛露國を攻伐せ早訶禄を軍艦分て三道に
進を攻め大流三ヶ十小流日乃至地長戦強弩
利劍良弓の兵器威を揮ふ一勇戦奮ひ巨炮連
発して天も裂地も破るるが如く
ペリユウ
孛露玉の軍
卒ども震ひおそれ魂魄を喪ひ悉く皆逃北
せるを敵に敵せざるものなし早訶禄勢に乗
て該城城陥しいれ出驅しくを問地なり攻所の
城邑ハ皆降服より吉合を乞ふ早訶禄の軍合
厳肅にして民人を掠殺せるを聞く百万抽戦
なりて人を思慮戦施に戦以て の故に孛露玉

の郡縣陣を多く試みて其帝拉
「キヌ」城を攻破り遂に帝の亜芸拉里拉を
擒にして放逐の法を行ふ前後三年の
間金玉を平地に埋ること伊斯把倫亜國の郡縣と
なる露の國人多く軍功に賞して帝
曰黄金銀は多く地中に埋るを惜む人の責
と為し則ち地を掘て之れを納めて
赤銀を掘てよと責む玉人再び銀を掘て
於是の「アメリバ」の死銀を掘り諸

皇子宗族を集合して皆伊斯把倫亜の王都
「カスチリヤ」より送り来りて「サバロ」「ソキトヤル」に
平定し別に地を分て学ぶ露「ニヤ」祈多察「カロス」加の
三大部となす各部に府を建て官を置く
内を治め以て露の国を
築き和国なり 王子及天教の導師を置き
を属して法を行ふ太守令長及官を置き
所に学校を建て以て人を教化す亜墨「アメリ」
利加「カ」の都て金銀の多きを世界に冠す
而して露の金銀の多きを又「アメリカ」の第一と

初免士人の「インカス」ト処を救ふとて英国室王金銀
銭陶てしを英国室の長武丈武丈人廣さ丈七尺余を
ものさしとなす丈武丈人金銀を金銀の多き所に移る
〜伊斯把倫亜國まて此国を放て移す所の
金銀の大数毎年七千武百余万とかぞへ五百三十六
年（日本文明五年明治五年）ヨリ伊斯把倫亜人「ペリユウ」より出を
出して南方の智里（ヂリ）国を吞保し智里国より
して又東方の巴剌（ラキユス）歪の国銭併せ亦字露國の
地界方金加西瞞国銭攻元より此三國ハ皆
土地廣大なるて金銀を出しを他の地を極めて

殺し悉く其地を征服し如国より守合乃天教
導師ガ率線ヒ来り此地を除き教化せ
しむ芝居を聞いて西洋諸国の中を経て伊斯
把倫亜國王最英明なるして遂て他国自国の賢
者を招集し以て大官なる所を名を我を
さしむ芝居ハ名を降参なるして奥業西
洋の才を刑国の君主よりく及ぶの君を形ち
波尔（ポルトガル）杜尼尔（ドニキ）国の王を第二三拂郎察国の王
きハを国最廣大なるハ此者を諸国の諸尼（ドニキ）
利亜国と戦争して地を奪ふ等の事而已

行りて世一説とも海外の国土を巡るとおもふ
しとふ千五百四拾二年（日本天文十一年 明応諸説二十一年）に波尔杜
尼尔国の人「フランシスコセイモト」「アントニウスモオタ」「アント
ニウスペキット」小海を渡ひ風に乗らつく始て東海
日本国に到る実に是我日本天文十一年秋七月
のことなり其後国神宮廟を設る歐羅巴（ヨウロッパ）の
人の日本に来りし始なり波尔杜尼尔の人厚幣を
以て国王大友宗麟に交易を通せん ことを求
請ふ大友宗麟別て是を許す 鉄砲の日本に
渡り及び其制作の法伝りしも此時なりの事なり

天明年の秋八月波尔杜尼尔国の人六〇の大船に
乗て小倉に渡る海上を船に乗る者絶八大隅の国種子島
に泊せ是時「ポルトガル」此の国の大友宗麟に献する
所の奇物珍宝極多て驚し宗麟厚礼に
答んとて使を遣せ尼尔杜尼尔国に
しむ王使斎藤源助彼地に至て病死しき墓
今に波尔杜尼尔の王故ある里西波亜の城
に在りとふ千五百六十四年（日本永禄七年 明応諸説三年）に伊
斯把你亜の人南「ピリピイシセ」中の大島呂宋国
を併せ是を治て堅城を築き結局城を築く

大唐僧官ハ我国ニ土人を教導に此地より肉桂丁子故椒甘草肉荳蔻椰子檳榔沒藥藍良姜沙糖等我相交ること出ス殊珊瑚宝珠を産ス諸穀菓極めて多ク又此地を以て南海の要衝と して日本の正面を遮る 爪哇島を開て是より守令を置き又乾陀東方に沙羅川 諸番我開きて有彼を築き以て呂宋国と亜墨利加諸国の海船往来ス便を此海中ハ諸番大小数千一百余所を而して此中ハ於て呂宋国大こ此諸番ハ中華の廣東と日本の南海と印度亜の馬路古諸番の東ハ所謂イスパニヤ国の王を ハ非利皮島斯第二世の君と云ふ此王一を国ハ命し彩伊斯把尓亜及び露西亞の地方ひろく大海を隔て始て此諸番我国に至る故ニ我王の名ヒリピヒイ国の諸番と命ス ビヒイ国の歸を云て ヒリピヒイ国の諸番と命ス 凡此諸番年候温熱土地極めて肥沃にして穀しく諸の産物我出ス所多我国に於ても此を貿 或ハ人を極て開拓ス一千五百八拾三年日本天正十一年 伊斯把尓亜ハ亜墨是可国の西小なる地続きの大地を併呑し彩墨是一所と号ス此国山岳

多くれた土地を肥饒にして強く親の北見錦
玉ホ城廓を築き土人ハ格郎一名なる数多自立の
酋長を称して葛西格斯とて北地惟是
一時の主として敢て孫を世乃至るものを非ず
格斯伊斯把倫亜人教授して開化せしめ初め数
百の城郭を築き学校を建て智及天教僧宮
を築て強守し且土人を教導其他皆格斯を清厄
利亜第那瑪倫加阿蘭陀の法を亦若干
交易の業を勤め専ら商業を為すと清厄
利亜人小亜墨利加洲の内より移る新清厄利亜

ピル亜尼亜「マリイテン」等の地を開き城郭を
築き市を今を築き以て是を防ぎ是時を当り
て阿蘭陀の主雄傑の人なる武備精強且又
新法の業を専務として法邦の賢能の士を招
集し万の小国を治めて法邦の威名
日々盛なり一千六百十二年日本慶長十七年明万暦四拾年に阿蘭
陀人馬路古諸島を通し次第に地を併
せ城郭を築き以て四方を通商す一千六百
十六年阿蘭陀人「ヤアコブ」と「ヤアコブ」と右遠要
利加洲の南「スクアテンラン」と人る島の

那る海峡を通りて大地の南北に航行し大地ハ
これ海中の島なりて大地の連属せる者なる事を
知り困く是よりして黒雲毛臘尼加地天下第五
の大洲と云事を發し又「メヤラニ」峡ハ海路危
険にして今氏「ヤアコプレマイル」ら見出し多海道の
安隠なる地なり今まで西洋の人「アメリカ」の南
地なく東海を出るまで比るこの新に開きし海道
を船切に故に此海峡を名付て「コレヲム」峡と云一千
六百十九年日本元和五年明万暦四十七年より阿蘭陀人「ボルトガル」國の司
カタ巨の地を拠て堅固なる大府城築き「ハメヒヤ」城と

名付け大都督副都督諸官の有士三千余輩大
舟五百艘精兵一萬六千余人を備つて永く城郭護
しかく東海諸島を通ずる根本の地を形成今
日本より来る海船皆此新に開く玉帆なる形り又
中華の商船多く此城を築き軍卒数多
を備つて是城守り毛千六百二拾三年日本元和九年明天啓二年
より阿蘭陀人「ポルトガル」国の所領南亜墨利加洲
の中伯亜児国「ブラシリヤ」城攻めて数州の地を奪ふ一千
六百四拾年日本寛永十七年明崇禎十三年より阿蘭陀人和蘭「ホランド」城
かく満剌加の国城「マラカ」を悉くして波「ポルトガル」牡「ポルトガル」

人我退出して之を奪ふ其人数六百
五十年（日本慶安三年 清順治七年）阿蘭陀人亜弗利加洲の喜望
峯を過ぎ印度の沿岸攻めて其地を
大城部を築き都督軍卒を備へ本国より司令官
を遣はす前年（旧暦文永十二年）阿蘭陀国より使を清朝
に送りて貢を修め交易を乞ふ此
年広東府に至りて逼迫し次年は広東より
発して江西南京山東を歴て小京
に到り方物を貢献し朝見を乞ふ阿蘭陀の法制

は通せず然れども自分勝手に貢を通商強求し
先年日本の土民を引き連れ来り或は領知
を求ふ故遂に有名なる三頼の悪奴等
船を駕して沿海を荒し或は侵掠し或は婦女
人民を略し或は城邑を焼き陸地に西洋大海賊
湾島安南東京暹羅呂宋爪哇渤泥を劫て
海の諸国皆倭寇小国なるを以て諸国より
使を日本に奉して海賊を禁止せしむを請ふ
其の要旨は倭寇を禁止せしむを請ふ
して海賊を禁制せしむ

羅（海外ヨリ渡レル出ク瓜哇（ジャワ）暹羅（シャム）呂宋（ルソン）ノ諸国ヲ指ス）倭寇益甚シ諸国ノ日本ト使シテ禁止ヲ請フヲ数度ニ及ブ而シテ於是人ノ和国ヨリ出ル我禁ヲ違シ海外ニ渡ルヲ禁ス船舶ノ制ヲ定メ帆柱ヲ限リテ廣船造リノ制ヲ我ガ国ニ制セラルヲ以テ日本ノ海船外ヨリ帆ヲ張ルヲ禁ジテ自国ノ通商風俗ノ雖ヨ命ヲ奉ジ来ル者多シ是日本人ノ航海操船ノ術ヨ拙キ根元ナリ其人ノ「インデヤ」ノ「ヨヲロツパ」「ハタヤン」「ヨシヒ」「カランカル」「ホルガル」「カナノオル」則（セイラン）蘭ホノ諸国ヲ通シ伊斯把伝亜及ビ波尔杜尼尔ノ国人我退ヲ或ハ城郭ヲ築キ或ヲ高館ヲ構ヘ我ガ交易シ貨物ヲ我ガ国ヲ脅ヲ行フヲ以テ元和二年（日本寛文八年 清康熙七年）ニ阿蘭陀人南亜墨利加ノ北界「ヨリナヒ」ノ地ヲ我ガ国ヨリ大ヨ城郭ヲ築キ居ルヲ以テ西方ノ官府ヲ称シ「ヨヤカタ」ヲ東方ノ官府ヲ称シ「ヨヤカタ」ヲ世界中ノ商ヨ便利ヲ又「ヨリナヒ」ヨリ亜墨利加ノ諸州及諸島ヲ呑保シテ悉ク府城ヲ設ケ官ヲ置テ工人ヲ

治め且教化せむ為時を聞りて西洋諸国の君多
くは其国の富盛なるを慮を達大なるして賢哲
を任使する政治なりと雖ども
故るの伊斯把巴亜と波介
拉尾尓の強大なるも阿蘭陀を敬て
を強礼とせり 自国狂安穏なるを以て賢者
阿蘭陀に集るを以て
郡の地にして西洋自国の国に於て小国
なれども其主の英明にして賢能の士を但せり
を用ひ諸国の為に敬て為に国富を強く
威名一時世界を震動せり 曾て西亜細亞
洲の内にて最僻遠の地にして往古より他国と通せ
しことなかりしに国主ヨシヲフスシリテス
の世子曾て
諸尼利亜国の人リカルド
支国の アルカシエルの地に通して交易せり
より曾て西亜より海船を出して他国と交易せ
るを以て始めて
世界に聞こえ天下の賢材を招きて
を大師フランツイス及ヒシナメラキウス ホットハンス
ホの教を受けて京都に北方を選して改革
新に土地を四方に広き大なる船を増造り西亜

窩斯徳海(ヲヽスト)より歐羅巴の諸國ニ通し南ハ北高海
より八百尒西亜と印度亜の諸邑ニ通し黒海ニ通りて
韃靼及都児格等の諸邑ニ通し東ハ止白里亜(シベリヤ)イ
ルキウツカ及ヲホウツカの地を包きて白止里亜(シベリヤ)の東界
可ムサツカの海港ニ城郭をかまへ其都督軍卒を置
て北亞哉踏守し是哉以く基本として亞墨
哉發して右ニ帖次國の諸島を開拓したハ北亞
墨利加(リカ)の諸邑及ひアレウツキヤ(北海の島なり)諸島哉ひらき諸
邑ニ守合せと云ニ 或ハ和親哉踏ひて商館哉築
き或ハ兵威を以くこれニ臨ミて其地哉定めて其ニ擬り

或屬精強にして事業月々ニ盛んニ起り 模弘大ニ
して版図年々ニ廣まる其己の領める所ハ又思依
の及ふ所まて阿弗利加那馮尒加邑も亦其依
蘭土師児狼徳等ニ地の諸島哉ありき又航
海して諸邑と通商する哉以て國富て其強にして
屬國に阿る初免西洋の諸邑依蘭土及ひ伊
児狼徳の如き地廣大にして物産饒多なる哉以て
諸邑が人哉極て其地を取りきりし 此地小極出地
六旋余度ハ梧度余ニ掛れる哉以て夫くふく
地変りして人物ありく凍死し枯骨積て山をなせ

とも遂に此花を忘るべき所なる者なし故に肥前的
亜国の人に「イハンネスデヘンチラウス」といふ者あり天資穎
悟にして窮理の学に精しく亦医術に就て工夫
を凝らし其地の病因を発明し弟那瑪介加(デンマルカ)国の
王に語て自ら依蘭土に到り十九ヶ月にして「テ子ルル」也
に帰りしに同船ハ拾七人にて内壱人ハ病不志那りし
弟那瑪介加(テ子マルカ)の国王大に「ヘンチラウス」が功を称歎して
して褒美として大膳を以てしたし比二国戦闘
拓し遂に事業を成就せり今依蘭土と脉兒(ガル)
狼徳(ウンテランド)の社頭に人家既に数十万戸なる者是則

「ヘンチラウス」が其地に病因を発明したるの大功なり今
此島騎ん魚一角其他の皆羽獣皮等を産し
大に弟那瑪介加(デ子マルカ)の国の富厚をなせり
此ハ古より勇猛の国にして隣国と戦ハ西洋無双と
称す此国昔より隣国の拂郎察国と仇を結
びて互に雄を争ふこと此国にて張ふ所
なき末魯西亜(コロシヤ)と同盟となりて威厳あきらかに
強盛になりて其千七百零七年日本宝永四年清康熙四十六年に当る
可薩亜(カウジヤ)国を攻めてこれを併合せ此国も一の自立
の王国にして諳厄利亜(エキリス)と地境なる大島の長

百四五十里幅百弐三十里より三十四箇所の部落
を千七百三十六年（日本元文元年 清乾隆元年）より諸尼利亜国より
して意爾蘭（アイルランド）大国を攻撃て之を併せ然も又
「エキリス」正面の大海を隔て自立の王たりし長百四
五十里幅六七十里にして四大部落に分つ氣候融和
なれて穀菓菜蔬泉麻等殖産豊富なる
牧地有りて駿雲諸畜殖出すむ〳〵蘭里丹尼亜と
称国なりて此「エキリス」「スコットランド」「イルランド」の
三国を合併せり今「エキリス」王既に此三国を併せ
王多年を経て大蘭里丹尼亜国の王と

号を称せり「エキリス」国の公威益盛強なる国「エキ
リス」国佛郎察国と戦て大に是を撃破り七百六拾
三年（日本宝暦十三年 清乾隆二十八年）「エキリス」国が大に海船を出して
喜望峯を過り印度亜と亜剌比亜の諸国を
通し伊斯把倫亜及波尼斯杜尼尼の阿蘭陀等の
諸国の所領を攻めて多く是を奪ひ是時墨西哥
亜国より鞠亜及北白里亜の諸国を征して悉く
砂漠地と為す「コンゴス」国を征伐して「コンゴス」国古「ハイ
サル」湖の西南に当り土地廣大なりて 自立の国王
なり控弦の士数万古俗暴戾なり〳〵侵掠を事とす

魯西亜大小「ツシマス」を破り進て之を潰滅し焼く事千七百拾八年（日本享保三年 清乾隆三十三年）魯西亜の「カムサツカ」の知督府より数艘を出して東海の諸島を巡見せしめ「ツシマ」「ツ」「ロ」「ツ」「ロ」「ア」「ア」「ハンペンロ」「ロ」の駕せ艘を捜日本の阿波の沖海部那に泊せしめ千七百七拾二年（日本安永二年 清乾隆三十八年）魯西亜又「トニゴス」を攻て之を滅し牧場を設け遂に之を滅し牧場を併呑して大清国と国境を接し城郭を築て土地を防護せしめ清国利亜国沢界は強盛にして佛郎察と伊斯把伝亜及阿蘭陀

波尓杜亜尓等の諸国と戦争を為こと数度（ポルトカル）又亜弗利加洲の諸国及び亜利亜（アフリカ）亜利亜（アメリカ）亜「ペルシア」印度亜等の諸国を攻め諸国及所領を奪ひ之を奪ひ仏哇（シャワ）爪哇（ジャガタラ）泥呂宋（ルソン）諸島等諸国を因て清国利亜の戦艦を出し東南の海を往来し馬踏古及び仏利度印設等の諸島を掠り諸国通行の海船を攻掠し此諸国を奪ひ之を西洋諸国の商館等を攻撃破棄せしめ「ポルトカル」阿蘭陀等を屈服し国家を困窮し遂に和睦を結び「ポルトカル」「リス」国より地子銀を毎年貢ぎ奪ひ取り初め

清尼利亜国の王熱阿余業第三世の王なりしが
天資英傑にして甚武技を好み殊に銃砲火攻諸
器の術に於て究精ぬる極に達し抑西洋に於て
炮院を始めて造り出せり佛蘭察国なり昔
フランス国王同同の如徳亜に攻る我伯や同意大
里亜国の人に同じ子スキルキサスとなる者ありて炮
院を制して「フランス」国王に献ず王大に悦て重く用ひ
キサスを賞し「ナポレオン」大院を造製し以て同同を
代て大に益をなす西洋の火院を用ひる始とす則是今の佛蘭察炮の類なり日本の人

なのやまり呼て「ハラヒン」筒と云ふ者の形佛蘭察
に似て「フランシャレイキ」ともいふ是等の語の訛
なり「フランシャレイキ」を「ハラヒン」と云ふ
国恐く武器を用ひる技術より後
佛蘭察機を以て煙漏りて不密にして入子なりの院と
造り出せり大に便を發せり「ヒエエシヤ」炮と等
一変なり又第那隅命加国にて制を変して
大小種々の火炮技を世に出せり「ヒエエシヤ」院と等
是一変なり乗之清尼利亜国王の是此技術
嘗て乃て適く法国の術士に拉命して之を結構せ

窮極を極め炮筒の製造を奇巧にして
殊に巨筒鑄造の名なるもの
七ヶ所の中に於て清厄利亜国の大炮天下に
冠たり而して武威を遠く西洋に雄なり 武百十二
年以前寛政九年に清厄利亜国より阿蘭陀を
攻破り其王を奔走し今八魯西亜に寄居し阿蘭
陀の本国皆清厄利亜の郡縣と成りて此ジャカタ
に第の出張所のみ孤立し本長崎の津
の阿蘭陀船なる 同ロンドン 細工の精を用ひ及び
遠目鏡顕微鏡の上品第一国を通の産物八倍して

ふしと云ふ又近来英吉利国の兵勢益強大なりて
南洋中の比利時印度の諸島を侵略し伊斯拉
伯亜の戍を奪ひ亞細亞洲の諸国
を侵して次第に攻伐し殺戮して宇内を混同する
の意なり
右件我今載記する所皆先師梶園先生
の学説を所承なり 曾西亜の東洋を窺ふ
由て来ること久し 彼の菅蘭は斯加の都督府
八百ヶ小島を為るの根本にして所謂清厄
利亜の非利時印度の屯裏八州七南海を強略

さらに基礎ふり[illegible]
奉[illegible]方物我貢[illegible]我の漂民光太夫磯吉等を送
送りて蝦夷の地より和親を請ひ交易を
通せん事を請ふ朝廷許さず
其後 官より人を遣して吉を蝦夷の法爲を究
拓さしむ「エトロフ」等の地のを知ハ古来我邦の人の
未当て見ざる方を探索する不[illegible]して魯西亜の背
既に「キリスト」を建し而の志形り
文化二年乙丑の秋魯西亜国より「ニコライ
レザノフ」を使として書を奉[illegible]方物を貢我

国の漂民佐平次等を送りて長崎に来船
し再ひ和親交易を通せんを我請ふ朝廷又
固く拒て許さず「ロシヤ」を使る告て曰自今以後
必ず復来ることなかれ若再ひ来ることの
ハ大筒火炮以てるを送らんと使者「ロシヤ
レザノフ」憤怒せりとて翌年「ロシヤ」
怒帆を[illegible]年の秋海賊我が西蝦夷の内「カラ
フト」「リイシリ」諸湾の船舶を焼き我邦の戍
卒を擒にして而して去る同四年丁卯の
夏海賊我が東蝦夷「エトロフ」島の法船を焼き

戊辛を掠たり「ヨヤセ」の陣営を焼き大に利奴婢
狼籍を為し遂に国の南部の海上松前の
第館に居を移りて云々云ふ云ふ云ふ
玉の「カムサスカ」在番の賊徒なりと同年戊辰
の秋月賊松肥前七浦の港より地形を
奪ひ陣営を搆へ狼籍して云々云ふ
絨の諸尼利亜人形なりと彼諸尼利亜人国が
曾西亜と同盟兄弟の国なり 右の数国を
党を銀に幼子今の世界の大船且彼絨の
情を示黙して識る而已

文化五年戊辰歳十二月初吉東総の佐藤百祐撰

西洋列國史畧巻之下

防海策

防海策

予既に西洋列國の小史を著し以て蛮人泊海の事略を述べ集堂翁亦我反復琉球事を記して十有餘年予城中に逆勢〻曰甚哉番虜の狡猾なるを

我防海の由別ハ実に

国家南方の護屏にして共に大洋に臨めり昔し明和年中魯西亜の海船我防海の海部郡に港泊せしことあり備中守ハ何ぞ之を今日の海防の急務にあらざるや則ち予輩ハ一時の奇人なるに

拙言を吐んと予答て曰僕小人

ちんの所んゝ論んゝ和りとして大まの窟遇我辱
者あるときは我が中心の義なる所を法くさきんハ
なるべきなれば其日本の邦多るや四方皆屬あるを
以て備屬き而其事を為して手段の多服家能物
の国形りに何法為物の屬物ハ僅にまこと良策
我なるもの形一義日本絶国の物あるハ僅
勇味を顧みて考る所の策なりとされとも蜜策
を為すること甚多るこ所あれハ法一強の法ハ必ず
焼捨ものあり国家を為るに未だ
要磐ハ慈愛を深く信義を行ふなるなり

第二ハ物品を航海して通商交易さるるなり
国家富実されハ風俗敦厚なり窮乏なれハ猛薄
なるハ海を隔さるを形れ国家の大利我興者ハ
通商交易より大なるハ無し故に斯業我興さん
ハ永久を慈愛を為ものに信義を行ふ教
を以て仮令屬さるを之今大まの為めに其論を
なさんか蓋一天地の意暑行わる大功を成さて
も一方に偏なるものなりて万物の生産さる有形
を氣味を異なる東西の形質を図せさるハ我
以て東西相交ハ南北相通して而して後に其用を

金さる志あり若し疫疾饑饉等の変ありて穀
菓薬物の其用を不給ひ生民その天寿を全
せずして或ハ夭札の患を罹らも皇天豈悲哀の傷を
勝へん哉之国家を長久ならしめ改革して天地の人の
父母をして哀傷を勝へざらしめ免ハ仁と云へしん
故を有無相通窮達相用さるハ則ち天意を奉
行するの道なり且又蝦夷通商の業を興し富を
其国の富ませる而已ならず平常大詳を深く多く
の暴風逆浪及ひ海賊強寇等の危難を去のき往
来さるを以て其士民を富ませ敢精強なるを
従ふとも出て皆死を忘れ戦ひ奮ひ死する所
を以て国富を精し威勢強大なる所なり
又自国のみを保有して他国と出て交易せざ
る国ハ邦内有り余りの産物の利を分ち貧窮者へき
の術なき故に人民の繁昌する事疾て国内
次第に衰耗し遂ハ貧民父母の養を窮し
窮して其姪を売陥貶せらるる美人を天地の合
霊なりて人君の恩を貪ん且人後の我子を愛憐せざ
る者あらんや家上の生を捨て比極まるものなり

家の衰耗とを我等その故之を参考し
暮らすの形は日用の不足を困むようしてハ上
下とも全体のこと我等なり　愛慈の心も薄く
信義も亡失して欲心のみ増長し風俗次第に
極薄の形り大平の世なりその上我邦は豊
他の事まで衣食の困窮を以上より下一般に
流行することハ甚しつまる体なり上又士民
ことに全体の物好き色を用て花麗の場所
多くなる形なハ奢侈を自慢して
果て人我猫鼠のごとく相争一世の冠の

形りて炮流震動する我等を恐ち時勢を備
覘を震ひて前後不覚の驚きたるものあり因て
今其後の前を以て後を推に諸国の人情や海内の
古法其外其面の前の的なる者
を廃して新を的にて撃れ　放射する而已
形なる事まで震怒して逃走る道理を極り
次第あり是故我邦にて他邦に交易せざる
国ハ武備と衰弱の形り国内次第に窮之し
政教も少息の形り風俗と極薄の形る人心も険悪の
形りて此その防禦の備まても花麗の形るとぬ軍

年毎に四方の海路より数百の大船とそなへ(各人数)
を乗くせるもむるも外寇の為に財を費やして
く皆散乱して何の言もなきことのみ僕氏所は
旅く深く思ひをなす我々二第我建て年概要
を述べるなり
都日本の邦角や其地亜細亜大洋東南の海中
まのりて小極北二十六度より四拾六度の間
に気候温暖にして物産豊饒形り其人花
冨繁昌なる世界中に其比(きわ)なき形
而して西洋の人は我日本我々
相比方は今の世に当ては清(キリス)厄利亜国と
冨繁昌なる世界中に其威世界
震動する我々日本に対峙するもの
ともに日本国の地は小極北地にして
なれば則ち其地に
の我日本に志ざるを
形り而して彼ら今の
よく大洋を航行して
些まくも他船交易
今我日本は洋中の大海に我々
相比方は今の世に当ては清厄利亜国兵強く且
冨繁昌なる世界中に其威世界
震動する我々日本に対峙するもの
ともに日本国の地は小極北地にして
なれば則ち其地に
の我日本に志ざるを
形り而して彼ら今の
よく大洋を航行して
些まくも他船交易
今我日本は洋中の大海に我々

通商の業越興さんとその便利形勢実に世界
第壱の上国なり今其業越興さんと欲セバ先ツ
之を拓の制を堅固にして法令を厳に風俗及び寇
盜あらしむる為に新たに天文地理測量等の
学を明らかにして其法為越物ぬすむを武備を
厳重にして第里の大海を航行するを以て本の
熟路を行うがごとくにし先ず清朝及び安南羅羅
の法を使を使をきりしを礼をつくしを聘を
用いらるるを以て和親をむすび而して後日本及
蝦夷国の産物を輸送しを他法国の不物の輸
重を考て以て有益通ずるを以て市の利を収めしむ又
まず蝦夷地を開発して先ずカムサツカを攻れり魯
西亜より来て所の新たに越境して日本の領地を形成
きり城郭を構て日本の領地を形成し抑此
「カムサツカ」の地は右の西細亜洲の東方法国を通し
尤北亜墨利加の法なる陸を以要害堅固を形る
海港なり運送甚便形り格子司ロシヤ国より
当今及ぶ七百人の軍卒を派遣すを以て
此地を守り以て防法物の産物を収むる蓋し
此地を初めより夷人の居住なりしを司ロシヤの

属国となり、我日本の享保年中よりのちなり
いまに又北「カムサツカ」の地ハ「ヨロシヤ」の本国より地続の
西北の方「ヘトルブルカ」の新故城迄ハ七千
里ありて是も域の極り所の出岬なり「ヨロシヤ」国
まゝ此地の孤島なりて雪多く雖きびと寒り且此
「カムサツカ」ハ亜細亜と亜墨利加の二大洲の間なりて
東海の候嘴なるの意なりて此出岬（デサキ）より西北の方
弐百餘里「オホツカ」といふ地の大なる因く新港ヲ
開らしめ此「カムサツカ」に声接を接し以て東北の
大利を収め益と拓開し此新港を以て東

洋諸国を経営せる根本の地と為す今「オホツカ」
の港ハ「オロシヤ」より西南千餘人の
軍卒なり此「オホツカ」ハ昔ちより「ヨロシヤ」の
本国一通行せる陸路の入口なり然ども陸路
甚く止百里亜の大きを以て八月より五月迄の間ハ
毎雪多く所所なり尤「オホツカ」より「ヤコウツカ」
「アラメン」等の地まで四百里の間ハ人家ハ一家も
なく又定り有る道路も形く言ふもなきなり
馬上なりされハ通行なること難し「カムサツカ」「ヨポ
ロ」ハ馬のなき地なるゆへ陸路の通行毎年四五百里

を隔て「ヤコーツク」より馬をよばせ「オポツク」より「ヤコウツク」まで登る馬上にて峠谷を通行し夜は野宿して日数八五十日を経て「ヤコーツク」より陸路を我が国道中の難儀如何て云へるに松は「オホツク」「カムサツカ」に来る人数の五七十人乃ち財産を大抵は蝦夷西洋より東南大洋をめぐり陸地三四千里の里程に近に北海危険にして航行難し

又小船より四五艘海路を以て多くの月日費して大西洋より来航

する船り故は「カムサツカ」「オポツク」をやるは「オロシヤ」人皆を妻子を携へ指年貢の事を以「カムサツカ」を攻る事を後日に「オポツク」を攻る事今又三度の兵戦出して「カムサツカ」を襲ハ五百人の船師まて事是より又「ヒ」地を強護するに若干五百人を置て守る事又「オポツカ」ハ八百人まく事是れ「ヒ」地を生る要害堅固ハ「オロシヤ」再ひ「ヒ」地戦とり返さんと欲するとも又何そうの力なんぞ且軍船の通行するとハ何れのまるても思ハく水も少へさるるの大洋を三四千里隔

て大元を出し我日本を侵さんを触れさるも亦
論を俟たずして明白なり我日本の「オロシヤ」の虞なる
所以の者は只彼の「カムサツカ」と「オポツカ」の要地を
拠を以て進退甚便利なるを冠盗となすの甚
易きを恐れなり亦西洋人の天性なる皆志
甚大なるを彼は全世界を一統せんとの志
望を抱懐し者を呑併を以て勝となし他国の
隙窺なるを伺ひ隙に乗じて冠盗をなす司
シヤ国の百年已来のなる業を見るも之を窺
るを以り故に「カムサツカ」と「オポツカ」を取て早く

「カムサツカ」より倘(もし)んば亦東北の後患い測ること
へからざる彼城を今近大患なるを以て
遠き懸絶なるを以て左右の軍卒も多数なれば
今日の陸路四百里艱難なるを人家稀しとへ
ども彼「ペテルゴロオ」より山城拓きの城通して新
大道城作り法を伝授仕来の路程を便捷なるを
他国城攻奪ひし甚大なる候を考合せ彼狡
猾なる「オロシヤ」人いまだ検難の道城永く成なる
しく捨置「きや」五「ヒ道」「ヒ通」して旅館彈場の
成就なるを乃て日本の後患を大なるを「カムサ

巴「オポツカ」も亦攻たらんとせるへし幸ひに山
丸の開通せさるを以て北方の頭を防し城郭
武備を厳重にして「オロシヤ」東海を窺ふの原を
塞き以て絨毯の根を拔くへし三港は共に要害
極めて堅固にして舟運亦甚便にして実に東洋地
に於て亦其の要地なり此地我に帰するの後は
以て東北経略の基根とすへし船我
出しを傍の旅順及び小亜里利加の港を
開拓せるとの「オロシヤ」の故智を用ひなるひも
和親して交易我通し武威を以て是我畏

伏し日本より合衆及び教導師等を送りて
地を治め土人我服せしめ免を法令の拘束我
舎服して悉く日本より輸す清朝暹羅印度亜
等の諸国と交易し有無相通して以て
大利を収むるの「オロシヤ」をして以果完我
矢八幡ひ東洋萌蘖を生ずの根株なくして日本
の東心永く外寇の虞なく國家益強くなる
然る安寧なるん元我僕の防備の第一策を
施すも我日本太平既に式百年士民怠惰弱
ていうて大洋に横切して他国を攻伐の役を勝へ

者や故に僕の別に多数の死士を作り
丁術及び氏小方大義の地に役して軍卒の或は
疫病に罹るもの患なかんを我慮り我先師梶園
先生の東雲病考我述し又亡友山村氏と議して
先年和蘭那珂介國より彼永海夜國なる大度地
依蘭土及び郎児狼德を経歴せし書よりて
詳なる病原我論し依法我明らかにし以て精撮
を究極せり亡此小方紅毛の器のみは制船操船軍
制開國教導物産及び器械火攻等の次第
まく別に詳なる載記なりて氏第は贅せざる

前第八院に東小の防備我論さて東小の虞八利益
及び難部と備防等の法もあり我日本の
虞へきこの豈に而已に止まらんやかの大清国の強
大なるて密通形る万一狡猾の主のあるとなりて前
俤の志を興さは其患の大なるを知るに足
きなるんや故に氏大清国八早辞客聘を費し
て共に和とあるて安易を通し以て互市の大利を収
めんと今の世の要務なりむ八歐羅巴州の中
に於て伊斯把伊亜と波尼介杜亜介の二國最も兵
威精強なるて何国称く大洋横行南小アメリカ

の諸国を及び亜弗利加（アフリカ）と亜細亜（アジア）の中なる多くの他
国を破滅して其地を奪ひ属県と為せり
てかを唐ふひを後阿蘭陀の威を強くなりて
他国を攻取ること甚多くして九拾年以前
して「エキリス」国の会議基く強盛なりて「イスパニヤ」
「ポルトガル」及「フランス」等の諸国と連年数度の合戦を
為くなりて他の属国八多く「エキリス」に奪はれ
阿蘭陀おとい拾弐三年以前より本国八「エキリス」
に攻奪られて「ヤカメラ」等の襲所のみ残りたり
以「エキリス」国戦勝の勢に乗じて近来数多の軍船

を出して印度亜（ヒリピイン）也等の諸島を孔防し
校地として東洋諸国を併呑せんの志あり其賊
も示すの勢欲すて備さんかるこ多あり
を防禦手段八先ツ伊豆の七島より始めて南海
中の主人諸島我属ハ大倍等の土地の狭く人
の多き地より人を遣し植（殖）産を地に開きて
新田耕農の業を興し其南洋の中なる「ヒリピイン」也の諸島を開拓し
て其南洋の中なる「ヒリピイン」也の諸島を開拓し
悪くを地の産物を収めて唐朝安南暹羅（シャム）の
諸国と交易し為すに諸島を攻奪して琉球国

と犄角を張り不意に艦隊を出して呂宋と巴旦（バタニヤ）要の
地を攻取るに此二國人とも氣候温熱にして物
産極めて豊饒殖利多く人民繁昌に赴き
交易し此二國より人民流入を防ぎ武備を厳にして以て
此地を護し此二国と以て宗主の基礎とし
此地より又船を出して瓜哇渤泥より以外の諸島
為に絶島し或は和親を結ひ以て市の利を收め
或は兵師を出して以て其の弱きを扶け要害
の地に軍卒を置き武威を張り以て長駆南
洋を横行すは可キ事人猥猥多りと雖も敢て

東洋を何ぞ我が屈する所に成らざるや我が國
日本の國富を精く威勢の強大なるを以て次第に
を推廣めて遂に全世界皆悉く日本の有と
形成し彼清朝の強大も亦為に慮るに足らず
是や豈又南洋英蘭の地に役して軍卒の
疫病なんを我が亡友山村昌永氏と議し
て先年波尔杜尼尔國より「アリ」地の伯西児國
我宗主と増加する先師宇田川玄随
先生の東西病考を以て病原及び治療の

方法戦況の報告書類にて詳らかなり
且前後多くの死亡戦場の実況の我以上なる
他なし日本領土中の死罪のものを召集して
小笠原諸島に流刑せしものを八丈島および佐渡
隠岐等の諸島に於て操練し南方に用るもの八
伊豆七島に操練し而後に役に用る為
彼等は皆の意志の指揮の如く戦場に
却て害を招くを以て故に軍制指揮等甚
奇妙の事にて此等の事八とても教に尽き
の今日の戦争戦死溺没等の情実を考へ八

右報告に依り用ゆる八極利用の一方法にして
六尺余小と雨の法為に於て操練して居住
する我邦一方一日本の内地に不虞なれを別ち
豊富にて意表に出るの防禦の備甚厳重す
て便利なるものなりやは彼等のるハ別に詳なる載
記にて今こゝに贅せさる所なり我僕の防御の
才二策とも彼とも今の世に当りて八我邦武勇年
来の鬱平なる人皆昭代の繁花を楽しむ八有士の
君より下八士民の果きに至る迄只当年を面白く
暮らすのこと為して武備をいふ者を嫌む予の

防備策我觀之必ずしも狂なりとのみ云ふべからず
とて或は嘆り或は怒りて
ものを我知る我とつくとも彼黒船何と字露の二
玉八岳より同アメリカ 渡中より於て世子帝爵の
ものしも終に西洋人の為に破滅せらるまして千年
傳統の江山我失ひ永く蕃夷の擒と成れり亡
因て兵我に北八國恩を忘れ我の強き所
ものて霸を成防備二策を策せ 晉女の宋
國を忠告微言をもて止めんと欲して能はざる者
形只防備の防を嚴なんと欲せを数多

の大流を備てを打放の術を粘防外寇の
に遇たるを其初を打一発も大銃の多
多や陸地より備上に向く出られたを音の虚
に入りてお蔵たる者をもて似く響き小すして敬を
威たるを恐るるを以て海中より陸地に向く出て
見八甚大に震動して宛ら天裂地崩るがごとし
軍卒の動もたし公差我投擲して奔洗たるを
ものハを驚き驚魄たるを以て形り出て防備の
成を八拾列を軍令を嚴重せんを以て
ものり抑日本の人むしハ世界第一の富強國にて大明

及安南「羅」「ヨヤム」「ルスン」「ヨヤム」「ホルヲオ」等の徒忠皆ことごとく
倭寇を困まちるるの形ち豊臣氏の解を攻し
時は大明人数千挺の鉄炮を以て日本勢を撃破し
たるを見て甲冑を脱ぎ捨て赤裸
と形り明人の陣中まとひ入て後横自在に斬り
呈り明人大に敗走せしとし今の世の士民皆栗嚢廉
弱にして錦て戦場の後に用ひ難し必ず昔人の
ごく勇猛なりと忘れられ人数多しとも
労々ならず乃ち氏大船火薬銃砲を以て
奈何ともなる能はざる者形ち僅に人力銃

労せずして番船を焼打ちするが如き火船を制
作せり氏大船火薬銃砲を以て再銃を撃ち出すを以て
風波の逆巻を抱きて直ちに進むを前のごとく瞬
息の間に百町の外に機を設ずを待ちて
変化百出して火銃発するに及ては天地震動し
海水沸騰して且三隻一連七隻一連ごとの術にて
元の火船をのがれよく絨毯を巻き囲繞して
以て之を焼きたるも人力を假らずして大功を奏す
る良法形り此火船ホも亦兼て用意なるべし又数多
の大筏を備へまた弱き價等にて多く拵へられ

明人の説を孫子に引き合して以て制
さんと欲せんと欲するも終に混合せざる
形しを孫子かりて藩造されたる説なり
らさて見る因て支して孫子の法我国に引き孫
まり混合せしを孫子藩造説も鑽まて
自由に形る法なり此等の数事は別に詳の事載記
ある我邦に見る我異しおさん也

右防海策者本藩の少老集堂勇左衛門の客作後
百祐の所作形利以書一覧の後に則焼捨るき
の約束なれども其可気なるを為めに集堂翁と

議しに云そうに寄書きぬ程に彼の此策
のみの我邦細に辨しに多筆記三十巻ありて
名けて籌海新書と云其中に天文地
理経国牧民兵制撫御操練炮銃器械制艦操
船航海国北図南国教導鎮護物産和親
通商総論ホカ編ありて頗る当世要用多事
を載て實に奇妙の書形り奈何ともなすこと形
き八百祐の飯郷の急速なる我邦に天文
地理経国の三編のみ我写取を餘は写取して
止ぬ惜哉

于時文化六年己巳二月十八日

阿州眉山北居士　藤原邦貞誌

嘉永四辛亥年二月上下二卷寫

之七日間

石渡信雅